



到来した「あやめ祭り」の季節。市の花でもある「あやめ」は、水生植物園だけでなく、佐原の町並みの中を流れる小野川沿いも彩っているのをご存じですか。万代橋から小鮎橋までの川沿いに咲くハナショウブは、親子二代が40年近くボランティアで植え続けているもの。初夏の日差しが強まってきたある日曜日、一人黙々と花植え作業をする小井戸勇さんを訪ねました。

親子二代で織りなす 水郷花風景

小野川を花で彩りたい

水運に関わる中で



小野川に面した小井戸さんの家は代々米屋や肥料屋を営み、水運を利用して船で十六島の農家まで荷物の運搬をしていたという。「その頃は、水路が道路。船は島までのトラック代わりだったよ」と話すその積載量は2トントラック並み。だが、農道が整備されると配達トラックが変わった。やがて船は、父榮一さんの代には観光船に変わる。

腕利きの船頭だった榮一さんは、自宅前の河岸から船を出港させ、水生植物園や佐原の花火大会へお客さんを運んでいた。3艘所有していた観光船は、一番大きな船で37人

乗り。畳7枚ほどの客席があったそうだ。こちらも「今でいう観光バスみたいなものだね」と言って勇さんは笑う。

昔の小野川沿いは、商いをする家が多く、家々の前には河岸があり、階段を降りるとすぐに船に乗れるようになっていた。荷物の積み降ろしができる実用的な岸のため、「一時は、花なんかほとんどなくなり殺風景だったよ」という。

そこで、観光船の出航までの待ち時間にお客さんに何か楽しんでもらえないかと考えた榮一さん。小野川の水運に深く関わる生活から、ある思いが湧いてきた。「小野川沿いに花があればどれだけ

美しいか。

趣味の花栽培を活かして

榮一さんは、自宅前の船の発着所に花を飾ることを思い立つ。まずはハナショウブの苗を発砲スチロールに植えて置いてみた。

榮一さんがハナショウブを植えたのには訳がある。水生



こいと いさむ 小井戸 勇さん(佐原イ)

小野川沿いの下川岸区に在住。会社勤めの傍ら、小野川沿いをきれいにし、ハナショウブ(30種類)などの花を植える。その取り組みは、父(榮一さん)の代から40年近くにわたる。

植物園行きは観光船を走らせていたこともあり、観光客のおもてなしとして「あやめ祭り」への期待を膨らませる手伝いをしたかったからだ。こうして、自宅前の道路の川際にハナショウブを植え始めた。今から約40年前のことだ。

もともと趣味でジャーマンアイリスを育てていた榮一さん。当時の小野川沿いのハナショウブの写真を見ても、その大ぶりの花弁から丹精込めて花を育てていた様子が伝わる。これは植えたままではなく、きちんと根を掘り起こし、株分け作業がされていた証拠。「株分け作業は、開花後、暑い夏の間までにやるものなんです。が、やっぱり佐原の祭りは大好きだね(笑)。開花後の6月から祭りの始まる7月の第1週までには終わらせていました。作業は仕事の合間にして、相当な集中力でしたよ」。同じ作業をするようになって、初めて父の偉大さを感じたという勇さんは、そう言って当時を振り返る。



【写真】 ①昭和初期の小野川沿い(上州屋付近) ②畑で育てたジャーマンアイリスと父榮一さん(昭和53年) ③川際を飾るハナショウブと榮一さんが操縦する観光船(昭和62年) ④榮一さんが船頭を務める観光船(平成3年) ⑤小野川新橋とあじさい・コスモス ⑥白鳥も姿を見せて ⑦朝もやの中、水鏡に映るハナショウブ



両親の想いを継いで

榮一さんが亡くなった後、花の管理は母コトさんが引き継いだ。そんな両親の背中を見て、小野川岸の草刈り作業などを自ら進んでしていた勇さん。その勇さんが、初めて川岸に花苗を植えたのは、今から10年以上前に遡る。母が育てた花苗の中で、育たないと思われ、捨てる予定だった苗を「捨てるなら分けてくれ」と譲ってもらい、試しに水際に植えたのがきっかけだ。「舟からの目線により近い川岸に花を植えてみては」と思った



のだ。そして、育たないと思われた苗が土壌も整えていない川岸で花開いた。「これは行ける！」。希望の開花だった。

勇さんの挑戦

開花に勇気づけられ、「これなら花をもっと増やせられるのでは」と勇さんの挑戦が始まった。

植える場所の草取りなど、花苗を少しずつ増やしていく地道な作業の連続だった。川面から道路まで届く高さの葦などの草を取り除き、景観を考え、スマシレやツタなど自生する植物をバランスよく残しながらハナショウブを植えた。初めは作業がなかなか進まず、頑丈に根を張る葦に悪戦苦闘の日々が続いた。葦は地下に20センチから30センチは根を下ろし、横にも広く根を張り、とにかく手強い。除草作業の鎌も経験を重ねて様々な形のものに変えていった。

ハナショウブの苗も自分のこづかいを少しずつ切り崩し

て買い足していった。ハナショウブは地植えの場合、株分けなどを施さないと4年で花がダメになってしまうのだ。作業する幅30センチほどの細い

岸には、道路から梯子を下ろして降りる。体のバランスを取りつつ草を抜き、苗を植えることは容易ではない。作業に集中し過ぎて、足を滑らせ、川に落ちたことも何度かある。今年も、初めて種からの発芽にも成功した。花の種類もハナショウブだけでなく、コスモス、あじさい、菜の花なども植えた。特にコスモスは、開花時期などを調整し、6月から12月半ばまで花が楽しめるようにしている。「少しでも長く花を楽しみ、小野川の景観を楽しんでほしいからね。これからは花の色や高さも考えながら植えていきたいね」。

父榮一さんの取り組みを子ども頃からずっと見つけてきた勇さん。「父の残した景色を守っていききたい」と力強く語る。

地域にも広がる活動

勇さんは、現在も出勤前に草取りを欠かさず行っている。最近では、「公園のようになってきたね」と声をかけてくれる人もいて、憩いの空間にもなりつつあるようだ。小野川を行き来する観光船の船頭さんは、勇さんの取り組みを「きれいな花を植え、管理している人がいます」とお客さんに

説明しているという。作業中の勇さんを見かけると、「あの方です」と紹介してくれるそう、手を振ってくれるお客さんもある。

自分たちの地域を美しく、そして訪れた人を喜ばせたいと始めた活動。最近では近所でも花の管理や花植えを自発的に行う人が増えてきたそうだ。ひたむきな親子二代の取り組みへの共感が地域にも芽吹いてきた。

手塩に掛けた娘と花と

今の願いは、「ハナショウブの咲く時期に、来年成人式を迎える娘と一緒に成人式写真の前撮りをするのかな」とうれしそうに目を細める勇

さん。手塩に掛けて育てた娘と花。いずれ巣立ちゆくかもしれぬ娘と写る花と小野川。「生まれ育った小野川での思い出を忘れないでほしい」——そんな思いがたつぷり詰まった記念の一枚となるに違いない。



水郷佐原水生植物園の「あやめ祭り」を見た後は

小野川のハナショウブもぜひご覧ください

あやめ祭り

水郷佐原水生植物園
商工観光課
☎(56)0411
☎(50)1212

開園時間と入園料

■開園時間 8時～18時30分
■入園料 大人：700円、小中学生：350円
※20人以上で入園する場合は団体割引になります
◇シャトルバスも運行

期間中、JRの発着時刻に合わせて、佐原駅から水生植物園までを往復する、直通のシャトルバスが運行します。

■料金 大人(中学生以上)：500円、小学生：250円
◇シャトルバスも運行

◇佐原囃子

佐原囃子保存会・佐原中学校郷土芸能部による演奏。手踊りも披露します。

■日時

6月6日(土)・14日(日)・21日(日) 10時30分～、13時～

■野点

抹茶で和の情緒を味わいませんか。あやめ和菓子や地元産サツマイモを使ったお菓子付き。

■日時 6月21日(日)までの土・日曜日 10時～15時(雨天中止)
■料金 一服400円

嫁入り舟

舟に乗ってお興入れした水郷地帯の花嫁さんになぞらえて、幸せいっぱいのカップルが舟で園内水路を巡ります。

■日時

6月7日(日)・13日(土)・20日(土) 10時30分～(雨天中止)

郷土芸能の演奏会

◇おらんだ楽隊

■日時 6月13日(土) 9時～、正午～

園内舟めぐり

園内水路を娘船頭の巧みな竿さばぎで運航します。

■日時

6月28日(日)まで 8時30分～18時(強風、雨天の場合は中止)

■料金

大人(中学生以上)：500円、小人(3歳～小学生)：200円、大人団体(20人以上)：1人400円

■所要時間 約15分

水郷の嫁入りを体験してみませんか?

水郷佐原観光協会
☎(52)6675

- 開催日 あやめ祭りの期間中、火・木曜日(全8回)
- 対象 18歳以上の男女(ひとりも可)、既婚者歓迎
- 募集数 1日1組限定(先着順)
- 申込 体験日の1週間前までに水郷佐原観光協会
- 体験料金
 - ◇衣装貸出(花嫁3,000円/新郎2,000円)
 - ◇花嫁衣裳着付 5,000円
 - ◇体験記念写真 2,000円
 - ◇花嫁披露乗船 無料